

「わかりやすい説明」の特徴

—発話と身振りの分析から—

大神優子

(お茶の水女子大学人間文化研究科)

【目的】

「わかりやすい」説明とはどのようなものか。対面状況では、発話表現の工夫の他、視覚的な、図の併用や身振り等様々な要因が考えられる。本研究では、伝えるべき情報が比較的限定される手順の説明場面を分析し、発話と身振りがどのように聞き手の評価に影響するかを明らかにする。特に、発話についてはオノマトペを含めて内容も詳しく検討する。

【方法】

デザイン：聞き手による高評価/低評価を被験者間要因とする、1要因計画。

被験者：女子大学生50人。課題成績、発話長などの問題から、このうち43人を分析対象とした。

材料：手順の説明課題として、「心臓マッサージのしかた」を用いた。開始・終了を含め必要手順数は8。具体的な動作表現に終始し、箇条書きにした説明文(例：おおむけに寝かせる、強く押す)と、イラスト3点をB5の用紙枚で提示した。

手続き：個別実験。「ある説明の仕方について」の実験と説明。課題をおぼえるよう指示し、1分間の数字の逆唱をはさんで「できるだけわかりやすく」説明するよう求めた。聞き手には実験者があたり、うなずき、あいづち等を避けるようにした。被験者の上半身を8ミリで記録した。

結果の処理：発話及び身振りを全て書き起こし、Table1に示す各変数について数値化した。また、実験者が全員のVIRを「全体の善し悪し」「わかりやすさ」「安心できる程度」「おぼえやすさ」の4項目について各7段階で評定(比留間,1998参照)。この合計

得点に基づき、被験者を高/低評価群に再構成した。

【結果及び考察】

発話・身振りに関する各変数を従属変数とし、多変量分散分析を行った。各変数の平均(SD)と多変量分散分析の結果をTable 1に示す。高評価群は低評価群よりも全体の発話量が多く、特に、表現を変えて同じ内容に言及する「変化繰り返し」、「順序語・句」、理由などを説明する「補足表現」が多かった。また、高評価群の方が身振りを多く用いていた。さらに、オノマトペと身振りについて分析したところ、高評価群は一人あたりのオノマトペの使用数が多く、そのほとんどに身振りが伴っていたのに対し、低評価群は逆のパターンを示した(Figure.1)。

身振りもオノマトペも、育児語で多用されることからわかるように、ともにイメージを喚起しやすく、その意味では、少ない労力で多くの情報を伝える効率的な表現である。従って、多くの有益な情報を効率よく提供した説明が高く評価されたと考えられる。

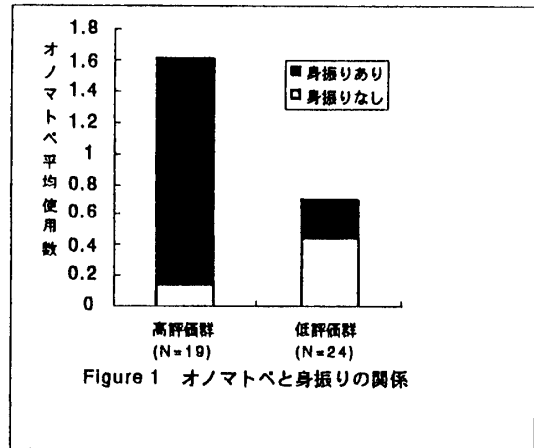


Figure 1 オノマトペと身振りの関係

Table 1 発話・身振りに関する変数の平均(SD)

	高評価群(N=19)	低評価群(N=24)	F 値 (注1)
発話量 (総有意味文節数)	57.53(10.23)	40.50(6.83)	16.31***
繰り返し総数	1.53(1.50)	0.79(0.88)	4.00 †
単純繰り返し	0.42(1.02)	0.38(0.71)	0.03
変化繰り返し	1.11(1.24)	0.42(0.58)	5.79*
順序語・句	4.58(1.92)	3.42(1.61)	21.16***
補足表現	3.21(2.15)	1.08(0.65)	9.46**
オノマトペ	1.63(1.11)	0.71(0.62)	11.81***
身振り量	11.42(6.79)	3.67(4.38)	20.55***

注1：全てdf=1,41

† : p<.10, * : p<.05, ** : p<.01, *** : p<.001